



藏閣成徳常照の賦

前 田 聽 瑞

惟ふに三藏は蓋し如來の道場である。上下三千載、光耀中外に盈ち法澤遍く群萌を滋潤す。寔に般若の標、道場の主は只三藏に在るを稱してよい。故に佛滅後直ちに大迦葉等の龍象は三藏を集結し、二十有餘師は之を傳持し、安清・童壽の碩匠は之を翻譯し、法顯・玄奘の大徳は之を搜索した。斯くて大千經卷は寂然として動せず、上智下愚分に随つてその徳益を蒙る。されば輪藏は雙林よりその端を發し、その後他寺皆之に倣ふた。

然るに、今わが佛教専門學校は洛北鷹野の勝境に位し、學舍靜寂にして清衆堂に滿ち、學究室に溢てれども、附屬圖書館の設備は未だ成らなかつた。闔宗は齊しく四恩の奉爲に一日も早く圖書館の建立を希念したが、宗門清乏にして志有つてその力が足りなかつた。古語にも「道は人に在り、持種は縁に由る」といふ。

爰に清居士上村常次郎翁は洛東下河原に居し、資性重厚謹嚴、夙に百萬遍知恩寺第六十八世、元佛教専門學校長土川善激上人に歸向して晨禮夕誦、寔に篤實護法の士であつた。

予亦乏しきを佛教専門學校に職を奉じて、親しく土川先生の指授を蒙る。先生、心慈悲に住し、思ひ宗學に存して、上智

下愚を論ぜず、能化所化を看す宜しきに随つて提撕し、人を誨へて倦む所がなかつた。かくして、能く大名を享け當世に顯はれた。洵に先生は縉素の歸憑、人天の導師であつた。宿縁の薰發する所、上村翁は土川大僧正と道交深く、常に心を四攝に住し思ひを忠孝に存した。斯くして翁は生平聖經に所謂「典範の智慧は衆道の要なり」の金言を信順し、夙に財團法人成徳會の設立を企圖して世道人心のために大に寄與する所あらんことを期した。されど三界の縁生は幻化の如くにして留らず、無常の嵐斯人に壽を假さず、昭和三年八月、翁は遂に溘焉として逝いた。返魂の妙香空しく焚いて力無し。嗚呼哀しい哉。味を棄て交を絶ち愁哀する際、歲月疾く廻つて翁の七回忌は忽爾として臨み來つた。時偶々わが佛教専門學校に於て附屬圖書館建設の議起り、土川大僧正の高足江藤激英師はこの間に介在して、本校内外の事由を具して之を上村家に諮るゝころがあつた。是に由つて、上村米子刀自は一は翁の志を體し、一は翁の冥福を薦めんがために、巨額の淨財を喜捨し、有爲の材を以て佛教専門學校附屬圖書館藏閣成徳常照を建て、以て千古の遺美を發し萬劫の良導となした。その嚴護法城、濟世益物勝けて言ふべからざるものがある。唯衷心の至誠を披き、至高の敬意を捧げて、上村家の恩義を銘記せんのみ。

然り而して、茲に公私多端、茲に分陰の至貴なるを割きて無私奉公、圖書館建設の勝業を助成せし、佛教専門學校長小林瑞淨師、建築委員小林圓達・石井龍善・江藤激英の三師並に建築設計者第三高等學校教授八木清之助氏、工事請負人松村雄吉氏、現場監督宮川久三氏等、その他この勝事の達成のために、直接間接その不請の援助を贈つた内外の大徳

諸家の懇志の崇高深厚にならに至つては吾曹喜躍の極、何の辭を以てか之に當るべき乎を知らない。

時維れ清秋菊花放香の新嘗祝節、吾曹偶々藏閣成徳常照の竣工をこゝほどの勝縁に會する、寔に欣幸に勝へざるものがある。本校は曩に校舎の移轉改築あり、今また附屬圖書館の新築成る。本學苑は正に是れ飛龍天に冲せんことを好機である。學苑盛衰の機は繋りて、その重責に膺る人々並にこゝに學ぶものゝ覺悟如何に在る。冀くば本學苑に學ぶものの、藏閣建立の緣由こそその本旨を忘れず、勇猛精進、學術の攻究と信念の培養にこれ勉め、以て「自信教人信」の聖訓に答へられんことを。即ち筆を削つて其始末を記し、以て恭しく衷心の隨喜を表すこと云ふ。